

突厥第二可汗国の内部対立  
——古チベット語文書（P. t. 1283）にみえる  
ブグチョル（'Bug-čhor）を手がかりに——

齊藤 茂雄

漠南で回紇<sup>ウイグル</sup>などの部族連合によって滅亡した突厥第二可汗国（682～744年）の遺民集団は、古代チベット語『北方誌』（P. t. 1283）文書において、ブグチョル（'Bug-čhor）として現れる。ブグチョルという名称はカプガン可汗黙啜（691～716年）に比定されているが、なぜ滅亡後の遺民集団が黙啜と呼ばれているのか不明であった。

しかし筆者は、唐代の詔勅や墓誌において、滅亡前夜に回紇などに討たれた烏蘇米施可汗<sup>オズミッシェ</sup>（742～744）が黙啜と呼ばれている例を確認した。つまり、烏蘇米施可汗が率いていた集団が滅亡後も引き続いて黙啜と呼ばれており、『北方誌』はその情報に基づいて遺民集団をブグチョルと記録したのである。烏蘇米施可汗は登利可汗治世（734～741年）の左シャド判闕特勤の息子であり、ブグチョルは判闕特勤まで遡る。

さらに、ブグチョルの淵源はカプガンまでたどることができる。カプガン<sup>クトゥルグ</sup>死後、骨咄祿（682～691年）の子、闕特勤<sup>キョル=テギン</sup>のクーデタによりカプガンの近親者や側近が肅清され、闕特勤の兄が毗伽可汗<sup>ビルゲ</sup>（716～734年）として即位した。迫害を受けたカプガン一派はカラ=イルティッシュ河付近にいたカプガンの子、拓西可汗の旧領に逃れ毗伽可汗に抵抗したが、720年にその支配に服した。しかし、毗伽可汗死後、登利可汗のもとで再び反乱を起こしている。彼らはカプガンの直系者が率いたためブグチョルと自称しており、最終的に彼らの中から烏蘇米施可汗が現れて突厥可汗国全体を率いることとなる。

突厥第二可汗国では、初代の骨咄祿が死去した際に弟カプガンの篡位があり、それに不満を懐いた闕特勤が、カプガン可汗死後にクーデタを起こした。そのクーデタに不満を懐いた人々がブグチョルとなって毗伽可汗や登利可汗と対立した。このように突厥第二可汗国では、骨咄祿一族とカプガン一族の対立が大きな国内問題として存在していたのである。